た。

——肩に手をおいていただかねば

X氏は、どうなったものかわかりませんでしたという言葉をのみ込んで、婦人に一礼をした。

左手の甲が痒い。石の群れは、レールの間で沈黙している。静かだ。平凡な、いつもの朝の光景がある。石の存在の強度は強いが、ぴたりと静止していて、まったく動く気配はない。

X氏は、いつもの自分を発見した。立つ位置、順番、歩数、待つ時間、距離、階段、知らないものは何もない世界に身を置き、習慣と握手して、姿勢を整えた。もう、不安はない。心の昂ぶりがある。不思議だ。力が身体の内側から湧いてきて、地核と釣り合うほどに、自分の存在が輝いている。眼は、あぶないほどの力で漲って、蔦色に光っているのだ。

ふと、2〜3日うちに、この長雨もやむだろうと思った。特別な理由はない。確かな根拠はないが、ただ、自分の思ったことが、そのまま現実になる、そんな気がした。そして、約束通り、自分は、あの女と海へ行くだろう。おそらく、まったく、自分はあたらしくなる。進歩するのだ、今まで、こわがっていたが、もう、1歩を踏みだす時だ。追いつめられて、自分を棄ててしまった者だけが、まったくあたらしくなることができる。足の裏をひりひりさせながら。

X氏は、吊皮を左手で握りながら、手のことを考えた。手とは何か？　そういう自分の問いかたはまちがっていた。むしろ、何が手か、そう問うべきだった。手は、ものを持つ、運ぶ、握る、形





を確認する、ものを作る、手は形だった。そして、手は、記号にもなる。記号はイメージをつくる。手が形をもつと、ものを解読する。手は精確なメッセージを受けると同時に発信するのだ。

手も思考する。論理よりも正確に。

X氏は、会社に着くまで、手のことだけを考えた。

部屋にはいった時、自分の存在が、いつもとちがっていることに気付いた。気配が、場の空気が、そう感じさせた。椅子に坐って、左手がどう感じているか、煙草を喫ってみた。激しい苛立ちがあった。右手に煙草をもちかえた。何かが変わってしまった。力があふれすぎるのだ。自分のなかに、何か、納まりきれないものがあって、それが大きなうねりを描いている。もちろん、誰も、そのことに気付いてはいない。

課長に朝の挨拶をするが、いつもどおり、眼鏡の奥の細い眼でああと頷いただけだ。お茶を運んでくれた女子社員も、いつもの顔だ。机も椅子も、社員の表情も、雰囲気も、昨日のままだが、たったひとつだけ変わってしまったものがある。10年も働いているX氏にもそのことが、明確に説明できないほど、微妙なものだ。

眼に視差というものがある。誰でも簡単に実行できて、確かめられる方法がある。顔の正面に指を1本立ててみる。2つの眼で、背景にあるものと指の位置関係を確かめておく。今度は、左右の眼を交互に閉じる。どちらかの眼を閉じたとき、指が左か右に移動するだろう。まったく指が動か